

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）

2021年度夏季グローバル・キャリア・デザイン1

第29回 ファースト・ステップ・プログラム オンライン

2021/8/31～2021/9/9

in インドネシア、オーストラリア、バチカン市国、
インド、フィンランド、ケニア、タイ、ザンビア、アメリカ



全体報告書

目次

第29回FSPオンラインについて.....	2
ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは.....	3
第29回FSPオンライン概要.....	3
研修内容.....	3
研修日程.....	4
グループ活動概要.....	5
参加メンバー紹介.....	6
事前学習.....	11
事前授業.....	12
オンライン交流会.....	12
全体学習会.....	13
事前課題図書.....	13
英語・日本語交流会.....	15
協定大学報告書.....	16
御講話報告書.....	25
事後学習.....	36
振り返りミーティング.....	37
事後授業.....	39
終わりに.....	40
謝辞.....	40
編集後記.....	40

第29回FSPオンラインについて

ファースト・ステップ・プログラム（FSP）とは

第29回FSPオンライン概要

研修内容

研修日程

グループ活動概要

参加メンバー紹介

第29回FSPオンラインについて

ファースト・ステップ・プログラム (FSP) とは

グローバル・キャリア・デザイン (通称：ファースト・ステップ・プログラム) は、北海道大学の学部1、2年生を対象とした2週間程度の海外研修プログラムです。グローバルなキャリアについての学生の視野を広げ、キャリア形成のファースト・ステップとなることをめざすプログラムです。2021年度夏季「グローバル・キャリア・デザイン1」は、第29回FSPオンラインとして、オンライン上で行われました。グローバルに事業を展開する企業や法人、国際機関などで勤務する方による御講話を拝聴し、海外協定大学などの教育機関での授業参加、学生交流を行いました。

第29回FSPオンライン概要

研修期間：2021年8月31日（火）～9月9日（木）

研修先：インドネシア共和国、オーストラリア連邦、バチカン市国、インド共和国、フィンランド共和国、ケニア共和国、タイ王国、ザンビア共和国、アメリカ合衆国

参加人数：37名

費用：無料（ただし、オンライン授業受講ための通信費用は学生の負担）

研修内容

協定大学の授業参加及び学生交流

協定大学の授業参加では、英語で行われる授業に参加し、授業に関するテーマについてディスカッションを行いました。学生交流では、お互いの大学についてのプレゼンテーションを行い、協定大学の学生とコロナ禍における授業形態やワクチンの状況、お互いの国の文化について意見交換をしました。

企業や法人、国際機関などで活躍されている方による御講話

世界各地でグローバルに活躍されている方々と現在のお仕事の内容やこれまでのキャリアについての話題を中心に対話を行い、そこでお聞きした海外で働くことの面白さや大変さをFSP生自身のキャリア形成の参考にさせていただきました。

研修日程

日付	時間 (日本時間)	開催都市	授業内容
8/31 (火)	10:00～11:40	ジャカルタ	IPB University-Institut Pertanian Bogor 授業参加
	12:00～13:35		IPB University-Institut Pertanian Bogor 学生交流
9/1 (水)	13:00～13:45	パース	Curtin University 授業参加
	17:30～19:00	バチカン	在バチカン日本国 特命全権大使 岡田 誠司 様による御講話
9/2 (木)	14:00～16:00	パース	Curtin University 学生交流
9/3 (金)	10:50～11:30	ベンガルール	日本航空株式会社 ベンガルール空港所 小林 春佳 様による御講話
	11:30～12:30	東京	日本航空株式会社 常務執行役員 柏 頼之 様による御講話
9/6 (月)	16:00～18:00	ヘルシンキ	University of Helsinki 学生団体Karavaaniの方々との学生交流
9/7 (火)	16:00～17:30	ナイロビ	独立行政法人国際協力機構(JICA)ケニア事務所 加藤 亮 様による御講話
9/8 (水)	11:00～12:30	バンコック	国際連合児童基金(UNICEF) 伏見 暁洋 様による御講話
	16:00～17:05	ルサカ	University of Zambia 授業参加
	17:05～18:15		University of Zambia 学生交流
9/9 (木)	9:00～10:30	ロスアンジェルス	SBI大学院大学 斎藤 慎 様による御講話

第29回FSPオンラインについて

グループ活動概要

海外オンライン研修の前から後にかけて、グループごとに分担して以下の活動を行いました。

プレゼンテーション

協定大学研修時における、北海道大学の魅力に関する英語でのプレゼンテーション

研修先についての調査・報告

研修先である国及び都市、協定大学、企業等の調査と全体共有の準備

全体学習会の企画と運営

研修先の調査結果を共有するための全体学習会の企画と運営

オンライン交流会の企画と運営

FSP生同士や、短期支援員¹（以下、支援員）及び担当教職員の皆様との交流会の企画と運営

御礼状作成

全研修先への御礼状の作成

報告書作成

研修先での学びや発見をまとめた報告書の作成

オンライン成果報告会でのプレゼンテーション

第29回FSPオンラインを通して得た学びをまとめたプレゼンテーション

Facebookページ更新

Facebookページ「北海道大学ファースト・ステップ・プログラム」の更新による、第29回FSPオンラインのPR

広報

本学内外の方に対する成果報告会についての広報

¹ 短期支援員の皆様についてはP9～10をご覧ください。

参加メンバー紹介

第29回FSPオンラインでは、リーダー1名、サブリーダー2名が立候補により選出されました。リーダー、サブリーダーは、全グループリーダー及び科目担当教職員スタッフ・支援員・先輩ボランティアと連携、協力して、プログラム全体をまとめました。グループリーダーは、グループメンバーそれぞれに目を配り、各グループの中心となってグループ活動を進めました。Facebook担当は、第29回FSPオンラインでの日々の活動をFacebookにて発信し、広報活動を行いました。

以下、グループごとに参加メンバーと活動内容、役職を紹介します。

役職の略称

〈リ〉 → リーダー

〈サブ〉 → サブリーダー

〈グ〉 → グループリーダー

〈FB〉 → Facebook担当

〈グループ1〉

- ・プレゼンテーション
- ・協定大学調査、報告
- ・報告書作成

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・御礼状作成



(左上から時計回り、以下同様)
神戸 結衣 (農学部2年)
筒井 菜月 (総合理系1年) 〈グ〉
新田 敦之 (工学部1年)
近江 海音 (医学部1年)
甲斐 はるか (経済学部1年) 〈FB〉
五島 祐美 (理学部2年)

〈グループ2〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・御礼状作成
- ・報告書作成

- ・協定大学調査、報告
- ・成果報告会広報



内田 結子 (総合理系1年) 〈グ〉
藤澤 萌 (医学部1年)
小南 明日香 (総合理系1年)
植田 達生 (総合文系1年) 〈FB〉
水谷 早希 (文学部2年) 〈FB〉
八城 実咲 (文学部1年)

第29回FSPオンラインについて

〈グループ3〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・企業等調査、報告
- ・報告書作成
- ・協定大学調査、報告
- ・オンライン成果報告会プレゼンテーション



松田 龍史 (総合理系1年) 〈リ〉
葛綿 みどり (文学部2年) 〈FB〉
野村 彩夏 (総合理系1年)
山口 莉奈 (農学部2年) 〈FB〉
齋藤 梨乃 (医学部2年) 〈グ〉

〈グループ4〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・企業等調査、報告
- ・報告書作成
- ・協定大学調査、報告
- ・オンライン成果報告会プレゼンテーション



福田 基紀 (工学部2年)
佐久間 雪音 (文学部2年) 〈グ〉
阿部 紀宜 (医学部2年) 〈FB〉
和田 瑛怜奈 (医学部1年) 〈サブ〉

〈グループ5〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・御礼状作成
- ・企業等調査、報告
- ・報告書作成、編集



伊藤 琢人 (総合理系1年) 〈FB〉
酒井 泰人 (総合理系1年)
佐藤 匠馬 (総合文系1年)
吉田 若葉 (文学部1年) 〈グ〉
後藤 衣玖 (総合理系1年)
横山 美裕 (農学部2年)

第29回FSPオンラインについて

〈グループ6〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・御礼状作成
- ・報告書作成
- ・企業等調査、報告
- ・全体学習会の企画と運営



圓谷 夏音（法学部1年）〈サブ〉
土屋 ひかる子（法学部1年）
〈グ〉 〈FB〉
小室 翔（工学部2年）
宿田 武（経済学部1年）
津金 響子（理学部2年）

〈グループ7〉

- ・国及び都市に係る調査、報告
- ・御礼状作成
- ・報告書作成
- ・企業等調査、報告
- ・オンライン交流会の企画と運営



西岡 佳子（医学部1年）
〈グ〉 〈FB〉
上鹿渡 康（文学部1年） 〈FB〉
田中 侑（工学部1年）
大塚 祥乃（工学部2年）
上須 百花（総合理系1年）

第29回FSPオンラインについて

〈支援員・先輩ボランティア〉

支援員、先輩ボランティアの皆様は過去にFSPに参加された先輩方で、御自身の経験をもとにグループ活動が円滑に進むようサポートをしてくださいました。

以下、支援員の皆様のお名前、所属、FSP参加回及び担当グループを紹介します。



内林 大志 支援員
環境科学院2年
第23回FSPアジア
全体管理、グループ4



梶原 若奈 支援員
理学部4年
第26回FSPアジア
全体管理、リーダーズ



松原 康稀 支援員
法学部2年
第28回FSPオンライン
全体管理、リーダーズ



逢坂 はるの 支援員
理学院1年
第24回FSP欧州
グループ1、グループ5



酒井 智子 支援員
水産学部4年
第25回FSPアジア
グループ1



木立 真凜 支援員
農学部3年
第28回FSPオンライン
グループ2



廣瀬 健 支援員
理学部2年
第28回FSPオンライン
グループ2



神 明里 支援員
文学院2年
第19回FSPアジア
グループ3



千葉 泰史 支援員
農学部3年
第28回FSPオンライン
グループ3



正田 晟 支援員
理学部2年
第28回FSPオンライン
グループ3

第29回FSPオンラインについて



中駄 勇太 支援員
医学部5年
第23回FSPアジア
グループ4



角田 亮平 支援員
工学部3年
第26回FSPアジア
グループ5



野中 康伸 支援員
総合化学院2年
第23回FSPアジア
グループ6



栗原 恭子 支援員
理学部3年
第26回FSPアジア
グループ6



酒井 聡史 支援員
総合化学院1年
第23回FSPアジア
グループ7



松田 涼花 支援員
経済学部2年
第28回FSPオンライン
グループ7

また、ボランティアとして以下のお二人をサポートしていただきました。



高橋 大雅さん
保健科学院 学術研究員
第20回FSP欧州



今井 ゆき菜さん
生命科学院2年
第19回FSPアジア

〈担当教職員一覧（順不同）〉

教員の先生方は第29回FSPオンラインという学びの機会を与えてくださり、スタッフの方々は事務的な面からサポートしてくださいました。

教員

北海道大学 高等教育推進機構 講師 川端 千鶴 先生
北海道大学 参与 客員教授 井上 修平 先生
北海道大学 高等教育推進機構 特任教授 荒井 克俊 先生
北海道大学 高等教育推進機構 特任講師 肖 蘭 先生

運営スタッフ

北海道大学 学務部 国際交流課 石倉 様
北海道大学 学務部 国際交流課 中島 様
北海道大学 学務部 国際交流課 望月 様

事前学習

事前授業

オンライン交流会

全体学習会

事前課題図書

英語・日本語交流会

事前授業

事前授業は、6月下旬から8月中旬にかけて計3回、オンライン（一部対面と併用）で行われました。

第1回事前授業：6月23日（水）

第1回事前授業では、まず担当教員である井上先生、川端先生、そして運営担当の皆様が紹介され、その後FSP生は複数回ブレイクアウトルームを移動しながら自己紹介を行いました。そして、授業の概要や授業受講にかかる事項に関して川端先生からの御説明があり、最後にリーダー・サブリーダーを決定しました。FSP生は不安を抱えながらも、全体像を知れたことで授業に対する心構えができたように思います。

第2回事前授業：8月11日（水）

第2回事前授業では、まず研修で交流する協定大学に対して行われる英語でのプレゼンテーションが、グループ1の皆さんによって行われました。発表後にはFSP生や支援員、先生方からの建設的なフィードバックがあり、研修本番に向けてグループ1は修正を重ねていきました。続いて井上先生による、研修で御講話頂く企業・組織の事前調査に関する授業がありました。効果的な調査の手法を学ぶことができ、FSP生にとって有意義なものとなりました。最後に川端先生による、「キャリアプランニング」に関する授業がありました。過去の自分を顧みて、それを未来に繋げようとする視点をもつことがキャリア形成に不可欠である、といった御説明が印象的でした。

第3回事前授業：8月18日（水）

第3回事前授業では、第29回FSPオンラインで唯一となるオンラインと対面の併用型で行われ、対面授業に参加したFSP生にとっては他のFSP生や先生方と初めての顔合わせとなる良い機会になりました。今回は、本学の遺伝子病制御研究所におられる茂木文夫教授、FSP担当教員である井上先生、川端先生の3名の方から、歩まれてきたキャリアに関しての御講話がありました。どの方も「人との出会い」に支えられたキャリアである点で共通しており、FSP生は今後の生き方に繋がる深い学びを得ることができたように思います。

オンライン交流会：7月19日（月）、8月10日（火）

グループ7が主催となり、計2回のオンライン交流会が開催されました。1回目は、FSP生同士の交流を深める目的で企画されました。まず初めに、アイスブレイクとして自分の前に自己紹介した人と自分との共通点に触れながら行う「共通点自己紹介」をしました。続いて、「パーソナリティーワードウルフ」という独自のゲームをしました。1名はお題に対してあらかじめ答えを決めておき、他のFSP生の聞く質問に「はい/いいえ」のみで答えて、その中で答えを推測していくゲームです。グループの違うFSP生とも楽しく交流できて、仲間を知る良い機会になりました。2回目は、過去にFSPを受講された先輩方との交流が目的で実施されました。FSP生は、ブレイクアウトルームを移動しながら過去のFSPの様子や海外留学など、様々な話題で先輩方と話すことができ、大変充実した時間を過ごせました。

全体学習会：8月23日（月）、8月27日（金）

全体学習会では、各グループが調査した研修先の大学や企業、それらが位置する国や都市に関する内容をそれぞれ発表して、FSP生全員で学びを共有しました。概要だけでなく、研修先の国の文化や言語も学ぶことができ、現地の大学生との交流を見据えた良い準備になりました。また、クイズを盛り込むなど工夫を凝らした発表が多く、聞き手に分かりやすい発表を目指して準備してきたことが伝わってきました。熱のこもった質疑応答タイムもあり、FSP生全員が積極的に参加できました。

また、全体学習会では御講話者様からいただいた事前課題についても触れました。図書を読むことを事前課題とされた御講話者様もいらっしやっており、これらの事前課題図書は海外オンライン研修での御講話内容に深く関連するため、ここでは事前課題となった図書について紹介します。

① 「対立の世紀 グローバリズムの破綻」 (2018)

イアン・ブレマー 著 奥村準 訳 日本経済新聞出版

こちらの図書は在バチカン日本国大使館 岡田誠司様からの事前課題です。1981年に外務省に入省されて以来多くの国々で外交を行ってきた岡田様のお勧めする、グローバリズムとは何なのかについて語られた図書です。

多くの人々はグローバリズムに対して良い印象を持つはずですが、しかし、本書ではグローバリズムの負の面を大きく3つ紹介しています。1つ目はグローバリズムによって利益を得た勝ち組と損害を受けた負け組の経済格差である「経済的不安」、2つ目は外国人の流入により自国の文化が侵される「文化的不安」、3つ目はネットによる考えの偏りといった「つながる不安」です。これらの不安を払拭するため2018年時点ではいくつかの国でナショナリズムの動きが始まっていました。その一つがアメリカであり、元アメリカ大統領ドナルド・トランプが、「アメリカ・ファースト」を謳いナショナリズムを進めました。

私はいままでグローバリズムは活発な経済活動や多様化による多国間理解が進む素晴らしいものだと考えていました。しかしこれらのグローバリズムの負の面を知ることで、自身の知見の狭さを痛感するとともに、グローバリズムのもたらした影響をもう一度見つけ直さなければならないと思いました。

本書の発行後、アメリカではバイデン大統領の就任によりグローバリズムに回帰し始めています。自身の知見の狭さを実感した今、これから世界の「グローバリズム」と「ナショナリズム」の動きに注目して国際情勢を捉えていきたいと思いました。（文責：吉田）

② 「世界をよくする簡単な100の方法 社会貢献ガイドブック」 (2008)

斎藤 慎 著 講談社出版

こちらの図書はSBI大学院大学 斎藤慎様からの事前課題です。

本書では、日本やアメリカ合衆国で御活躍されている社会責任コンサルタントの斎藤慎様の独自の視点から、世界をよくするための方法が分かりやすく示されています。世界をよくするとは具体的に環境保護、社会的少数者への配慮、ジェンダー平等への試み、寄付行為などのことです。これらが企業の社会責任として長年議論されています。みなさん誰も一度は世界をよくしたいと思ったことがあるはずですが、社会貢献は一見難しそうなことのように思えますが、実は誰でも簡単に始めることができます。今晚の夕食の野菜をいつもと違う生産地のものにする、使っている化粧品を替える、有機素材の衣服を身につけるなどの些細な行動によって周囲を少しずつ変化させることができるそうです。このように一人ひとりが意志をもって毎日の行動の一つひとつを見直していくことも社会貢献と呼ぶことができると斎藤様はお考えになられています。

こちらの図書を拝見して、買い物や食事、年間行事、冠婚葬祭、人との過ごし方、自分の活かし方など方法を工夫すれば今まで思いもよらなかった社会貢献をすることができることに気が付きました。私が特に印象に残ったのは「自分がやりたいことをする」という

ことが社会貢献に繋がるということです。世間の目に惑わされずに世界をよくしたいという自分の信念を貫くことの大切さを再確認し、これが結果的に社会貢献になり得るということを知りました。

本書では世界をよくするための100の「action」が著名人の考え方や行動を交えながら順番に紹介されています。簡単なことから少し難しいことまで様々なactionがあります。社会貢献をしてみたい方、ぜひこちらの本を手にとって小さなことから始めてみませんか。

(文責：後藤)

③ 「社会起業家 ―社会責任ビジネスの新しい潮流―」 (2004)

斎藤 慎 著 岩波書店

こちらの図書はSBI大学院大学 斎藤慎様からの事前課題です。

みなさんは「社会起業家」を知っていますか。社会起業家とは、自分の短期的な利益だけを追求するのではなく、ローカルおよびグローバル社会全体にもたらす長期的な影響を最優先にして事業を進める人々のことです。本書では実際に日本やアメリカで活躍する社会起業家を紹介しながら、社会起業家とは何か、社会にどのような影響を与えているかについて解説しています。

私はこれまでお金を稼ぐことと、社会のために行動することは全く別のことだと思っていましたが、本書を読んで、2つを同時に実現する生き方があると知りました。また、自分のアイデアを事業という形にまで発展させ、実現する社会起業家の行動力にも驚きました。

斎藤様は本書の中で「独立して会社を興す人だけではなく、組織のしがらみや偏った帰属意識のプレッシャーに負けずに、社会をよくしようと価値のある仕事にチャレンジする人も立派な社会起業家である」とおっしゃっています。社会のために行動することはとても難しいことだと思っていましたが、この言葉を聞いて、身の回りの小さなことから、社会のためにできることをしていこうと思いました。

(文責：佐藤)

④ 「社会起業家の条件 ソーシャルビジネス・リーダーシップ」 (2009)

マーク・アルビオン 著 斎藤 慎・赤羽 誠 訳 日経BP社出版

こちらの図書はSBI大学院大学 斎藤慎様からの事前課題です。

成功した起業家へのインタビューや著者の実体験を踏まえ、社会企業家に共通する成功要因とは何かをまとめた一冊です。一見すると自分とは縁がないテーマに思えましたが、この本からリーダーとして大切な心構えを多く学ぶことができました。中でも、「コミュニティにしたことに対して、尊敬以外の何も見返りを求めない」という文章に感銘を受けました。利益の追求よりも、まずは社会に貢献したいという想いを持つことが大事だという考え方は、私にとっては非常に新鮮なものでした。どうしてもお金の儲け方に目が行きがちですが、むしろ社会貢献が最優先のスタイルこそが成功するビジネスの在り方なのだ、と当たり前ではありますが深く納得することができました。他にも、活動を継続する上で大切である人間関係を、長くそして深く築いていくための方法など、今後の人生で大いに役立つヒントも沢山得られました。

この一冊を通して、「成功するリーダーとはどういったものか」という問いに様々な方向から考えることができるようになったと思います。人々の先頭に立って活躍したいと思っている人、リーダーシップを身につけたい人などにとってはおすすめできる一冊です。

(文責：伊藤)

⑤ 「被災地から日本をよくする100の方法—ギフト・エコノミーの幕開け」(2015)

斎藤 槇 日本をよくし隊 編著 NHK出版

こちらの図書はSBI大学院大学 斎藤槇様からの事前課題です。

本書では、東日本大震災の被災地で復興のために行われた様々な支援のうち、「ギフト・エコノミー」という考え方に沿った100の取り組みを選び、紹介しています。「ギフト・エコノミー」とは、従来の金銭のやり取りを前提にモノやサービスが提供される経済とは異なり、絆とクリエイティビティによって成り立つ「与える経済」を指します。被災地において復興の過程で行われた取り組みの中に、被災地の復興のみならず今後の日本の発展のためのヒントが隠れており、それを日本全体に浸透させよう、という斎藤様の考え方は私にとって斬新なものでした。災害の多い日本では、過去にいくつもの災害を経験し、そのたびにそこから復興してきた歴史があります。災害からの復興で得られた知見は日本独特のものであり、復興に携わった人々の努力の結実です。それを平時においても日本社会の発展のために活用できれば、日本をより豊かにできるのではないのでしょうか。

本書の中で取り上げられていた取り組みのうち坂本龍一氏が行ったプロジェクト「more trees」は仮設住宅周辺で木材を作り、震災復興と森林保全を両立する、というものです。このコンセプトは、SDGsの考え方とも合致しているのではないのでしょうか。地球の持続可能な発展のためのヒントが被災地にあった、という事実は大きな意味を持つと思います。本書では、社会の様々な側面で日本をよくするためのヒントが、具体的な事例とともに紹介されています。扱われている分野は多岐にわたっているので、誰が読んでも今後の自分の行動にヒントを得られるような内容だと思います。興味を持った方は、ぜひ本書を手にとってみてください。(文責：酒井)

英語・日本語交流会：研修1週間前から最終日まで、ほぼ毎日

英語・日本語交流会は、3週間に渡ってほぼ毎日、朝や夜にFSP生の有志で結成された運営メンバーによって実施されました。研修先の大学生との交流のために英語を練習する、御講話者様から頂戴した事前課題に関して共有し合う、などといったテーマを毎回決めて自由参加で行われました。英語交流会は、英語の得意不得意に関係なく気軽に参加できる和気あいあいとした雰囲気であり、楽しみながら研修に向けた準備ができました。また、日本語交流会では、「petari」という付箋を使ったリモート会議ツールを用いながら、実り多き研修になるように各自準備してきたことを共有しました。

協定大学報告書

IPB University Bogor Indonesia での研修

WA School of Mines: Minerals, Energy and Chemical Engineering,

Curtin Universityでの研修

University of Helsinki (学生団体 Karavaani)での研修

University of Zambiaでの研修

IPB University Bogor Indonesia での研修

研修初日、8月31日（火）の研修先はIPB University Bogor Indonesia でした。IPB University はインドネシア共和国のジャワ島にある本学の協定大学の1つです。当日は、Department of Food Science and Technology が開講する授業への参加、そしてその後IPB University の学生と交流をさせていただきました。

授業参加では、Food Process Engineering を専門分野としていらっしゃるPurwiyatno Hariyadi先生による”Global Perspective in Food Science and Technology”のテーマの授業を受講しました。講義はインドネシアの産業に食品産業がどのように関わっているか、商品としての食品ができるまでの過程、食品の加工に関係するさまざまな産業などの内容であり、この学部では多角的な視点から「食品」について学んでいることが分かりました。さらに、IPB University の学生とFSP生が3つのグループに分かれ、Tempeh chips, Dodo l, Pineapple jam などのインドネシアの伝統的で広く親しまれている食品についてグループディスカッションを行いました。これらの食品はFSP生にとって馴染みが無いものだったので、味や見た目、作り方などをIPB University の学生に教えていただき、日本の食品との共通点について話し合ったグループもありました。一方で誰も話しだすことができずに井上先生がファシリテーター役をしてくださったグループもありました。相手の英語を聞き取ることができず、英語で話すことやディスカッション自体にも慣れていないため積極的に参加できないFSP生が多かったと思います。しかし、自分の意見をはっきりと言わなければ相手に自分の考えを理解してもらえないことを学びました。実際、黙っている場面が多かったグループでは、自分たちがどうして黙っているかも伝わっておらず、IPB University の学生は困惑した表情でした。このことから、臆せずに自分の意見を伝えることの大切さを痛感し、翌日以降の研修では授業内容の予習や話したいトピックを準備するなど事前準備に力を入れ、研修中も失敗を恐れず積極的に発言するFSP生が多く見られるようになりました。

授業参加のあとは、IPB University の学生約20名と95分間の交流会を行いました。この交流会では、グループ1が北海道大学の魅力を伝えるプレゼンテーションを行いました。次にIPB University の方から大学についてのプレゼンテーションをしていただき、キャンパスの施設の様子や学部の種類、国際的な取り組み、またインドネシアの様子について説明を受けました。特に印象に残ったことは、IPB University が世界各地の様々な大学と協定を結び研究や交換留学などを行なっているということです。UMAP（アジア太平洋大学交流機構）と呼ばれるアジア太平洋地域の学生・教職員の交流促進を目的とした団体にも参加しており、これには北海道大学も参加しているそうです。次に56名の学生が4つのグループに分かれ、文化、言語、料理、人気の場所などのトピックについて40分間話しました。IPB University の学生はFSP生からのインドネシアのボロボドゥール遺跡についての質問に、その成り立ちを写真などを使って丁寧に説明してくれました。また北海道大学のプレゼンテーションの中にあつたキャンパスが雪に覆われている写真を見て、冬の間は学校にどのように通うのかといった質問が出ました。IPB University の学生は雪の経験がないということで、凍った雪道を歩いて大学へ通うという北海道ならではのエピソードに驚いた様子でした。交流を通して私たちが当たり前だと思っていたことが当たり前ではないということに気づき、自分たちの文化や生活を見つめなおすきっかけとなりました。オンラインではありましたが、学生交流さらには文化交流を楽しむことができました。

IPB University での研修は初日ということもあり自分たちの課題を見つけ、翌日以降の研修では何をすべきかを考えるきっかけになりました。特に事前準備や自分の意見を伝えることの大切さなどの学びは、研修中だけでなく今後のあらゆる場面で活かしていきたいです。
(文責：津金)



【上が授業参加、下が交流会の様子】
※赤枠がPurwiyatno Hariyadi先生

WA School of Mines: Minerals, Energy and Chemical Engineering, Curtin Universityでの研修

WA School of Mines: Minerals, Energy and Chemical Engineering, Curtin University (以下CU) での研修は、9月1日(水)の授業参加と9月2日(木)の学生交流の2日間にわたって行われました。CUはオーストラリアのパース、カルグーリーをはじめとした西オーストラリアの他、国外にも多くのキャンパスを構える大学で、北海道大学工学部の協定校の一つです。「農業」、「環境と持続可能性」、「鉱学と関連技術」、「社会と先住民」をはじめとする10の学部から構成され、特に資源工学(鉱山工学)の分野では2021年度に世界2位の評価を受けるなど、世界でもトップクラスの大学です。

1日目の授業参加では、Faculty of Science and Engineering の Dr. Richard Alorro (以下リチャード先生)による講義「Critical and Strategic Materials and Their Applications」を受講しました。講義では、スマートフォン・電気自動車などの先端産業やクリーンエネルギーに関する産業に多くのレアメタルが必要であるということや、レアメタルの分布・用途、リサイクルについて学習しました。特にスマートフォンには周期表に載っているすべての元素のうち80%が入っているということを知り、とても驚きました。

また、講義の後「電気自動車を作るのにはレアメタルが必要だが、レアメタルの採掘時や自動車を走らせるときに排出される二酸化炭素などを総じて考えたとき、電気自動車はレアメタルをあまり必要としないガソリン車よりも本当に環境に良いと言えるか」「中国でレアメタルの生産量が圧倒的に多いのは、レアメタルがたまたま中国に多く分布しているためか、それとも中国はレアメタルを採掘する素晴らしい技術をもっているためか」といった質問に対して、リチャード先生は一つ一つ丁寧に答えてくださいました。

どの学生も初日のIPB Universityでの研修の反省や英語交流会での練習を活かし、積極的に参加できたと思います。またこの日の授業後の振り返り会においては、メモを最低限にして英語を聞くことに集中することや、日本語に訳さずに英語でメモを取る大切さなど、普段日本語の授業を受けているだけでは挙げられないような感想が出てきました。ここでの気づきは、その後のUniversity of Zambiaでの授業参加に役立てることができました。

なお、この講義では事前に「Which materials are ‘critical’ and ‘strategic’」という英文を読み、身近な電気機器を挙げてその機器に含まれるレアメタルとその用途を調べ、英語でまとめるという課題が出されました。特に文系の学生にとっては難しい内容も多くありましたが、この課題のおかげもあり、講義の理解が深まったと振り返った学生も多くいました。

2日目の学生交流では、北海道大学、CU、九州大学の順に学生がプレゼンテーションを英語で行い、それぞれの大学の魅力を紹介しました。学生交流を行った当時、交流先の学部が位置するカルグーリーを始めとした西オーストラリアでは感染症は終息しつつあり、2か月前に4日間のロックダウンを終えた後はマスクなしで日常生活を送っているとのことでした。実際、学生交流時にもマスクをつけずに画面の向こうで複数人で話してくれた学生もおり、FSP生一同うらやましいと感じていました。感染症への対策や考えの違いに触れるとともに、世界情勢に意識を向けることができました。

その後はブレイクアウトルームに分かれ、研究室や専攻分野をどう決めたかお話を伺ったり、日常生活やコロナの情勢について話し合ったりしました。各ルームには1~2人のCUの学生及び九州大学の学生、それにFSP生と北海道大学大学院工学院共同資源工学専攻の学生が数名ずつ参加していました。

多くのグループでは、はじめに自己紹介を行い、互いの専攻や趣味などについて理解を深め合いました。九州大学やCUには現地の学生だけではなく留学生も多く、同時に様々な国のことを知ることができました。

自己紹介の後はそれぞれのグループが互いに質問をしました。例えば卒業後の進路についての話題では、CUのシンガポールからの留学生が、母国に帰って自分の国でさらに学びを深めたいという話をしていました。世界有数の大学だけあって、志の高い学生が様々な学びを吸収しにきているのだなと感じました。またコロナ禍の研究について、各大学で研究室の使用可能時間が限られていて忙しいという声も上がり、国は違っても同じような悩みを抱えているとわかりました。さらに、北海道大学が開講している夏季スペシャルプログラムであるHokkaidoサマー・インスティテュートに関する質問がCUの学生からありましたが、FSP生は当該プログラムに関する知識が不足しており、満足に回答することができませんでした。自分の大学についての知識を深める必要性を実感しました。

今回は2回目の学生交流だったので、前回よりも積極的に発言できたという学生が増えました。しかし、相手に質問はできても、質問に回答してもらった後にうまく会話を続けることができないといった課題が見つかりました。ここで見つけた課題は翌日以降の他大学との学生交流に活かすことができたと思います。

このように、CUでの授業参加・学生交流を通して、予習などの事前準備や積極性の大切さを学ぶことができました。また、コロナ禍の学生生活について現地の状況を学生の視点から聞くことができたことは、世界の情勢や多様性に目を向けるきっかけになったと思います。
(文責：内田)



【CUでの交流の様子】

University of Helsinki (学生団体 Karavaani)での研修

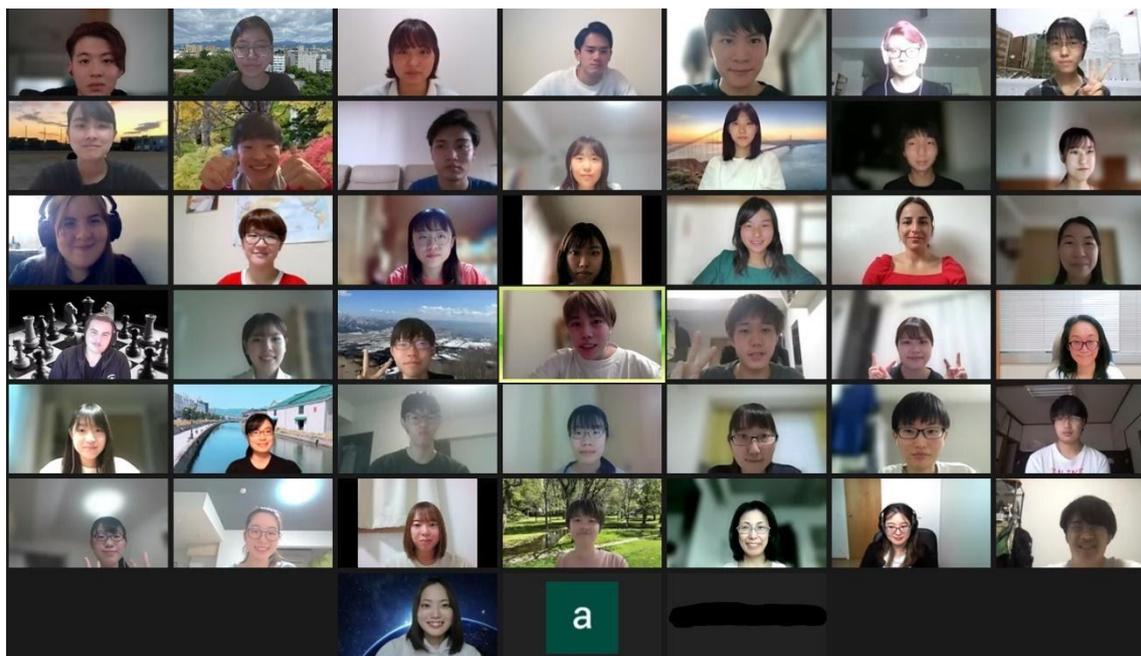
9月6日(月)は、本学の協定大学である University of Helsinki (以下UH) の学生団体、Karavaaniの学生とのオンライン交流が行われました。UHはフィンランドの首都ヘルシンキにある、フィンランドで最古かつ最大の大学です。1640年に設立され、11の学部と4つのキャンパスを持ち、3万人以上の学生が学んでいます。学内には本学の欧州ヘルシンキオフィスもあり、学生の交換留学も行われています。KaravaaniはそんなUHの教養学部(FACULTY OF ARTS)の学生が主体となって設立した学生団体で、中東、アフリカ、アジアの言語に興味のある学生が集まっています。アジアやアフリカの言語に精通している学生も多く、翻訳の勉強をしている学生や、日本語教師を目指している学生も参加してくれました。また、代表者のアンドレアスさんは忍者などの日本文化に興味を持っており、日本語も堪能でした。

初めに両大学の代表による、それぞれの大学のプレゼンテーションが行われました。UHの紹介では、キャンパスや学生生活についての説明がありました。特にメインキャンパスであるCITY CENTRE CAMPUSはヘルシンキの街の中心部に位置しており、観光名所であるヘルシンキ大聖堂もすぐ近くにあります。大学の行事の一部が大聖堂前の広場で行われることがあるなど、美しいヘルシンキの街と調和した豊かな学生生活の一端を知ることができました。去年や今年はそのような学校行事の一部がオンラインで開催されるなど、我々と同じように、コロナ渦の影響を受けている現実も知ることができました。

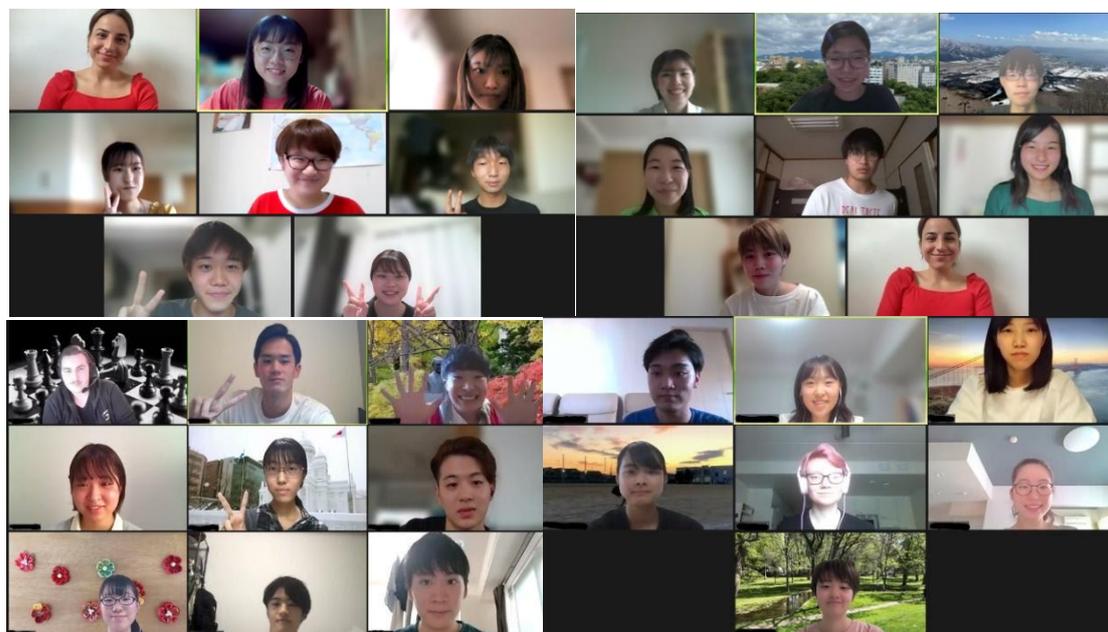
FSP生による本学のプレゼンテーションの後には、Karavaaniの学生から「北海道には多くの国立公園があるが、そこで何か研究は行われていますか?」という質問がありました。その場で満足のいく回答をすることができず、英語での質問に対してその場で対応する能力が足りないと感じる機会となりました。将来、海外での学会発表などの機会があれば、このような想定外の質問が英語でなされることも十分考えられます。自分たちの持つ知識の範囲で、最大限の回答を即座にできるような英語力を今後もっと伸ばさなければならぬ、と感じました。

その後、7~9人ずつのブレイクアウトルームに分かれ、フリートークを行いました。Karavaaniの学生が日本に興味を持っており、日本語を話せる学生もいたので、話も盛り上がり、どのルームでも有意義な時間を過ごすことができました。Karavaaniの学生が日本に興味を持ったきっかけや、日本文化、フィンランド文化などが主な話題でした。グループ6主催の事前の全体学習会で得た知識や、フィンランド語での簡単な挨拶などにより、こちらからも話題や話すきっかけを生むことができ、双方向的な交流が実現したのではないのでしょうか。学生交流後にFSP生が自主的に行った振り返りのミーティング(後述)では、フィンランド語を母語とするKaravaaniの学生が、英語はもちろん、一部は日本語も話せるという点に強い感銘を受けたFSP生が多く、語学に対するモチベーションが上がり、今後の語学学習への励みとなった、という意見が多く聞かれました。ここで得た学び・気づきを忘れることなく、今後の学生生活での語学学習につなげていきたいと強く感じました。

(文責：酒井)



【全体写真】



【各ブレイクアウトルームでの様子】

University of Zambiaでの研修

9月8日（水）、University of Zambia(以下UNZA)との学生交流と講義参加がありました。海外オンライン研修全体を通しての協定大学との交流はこれが最後でした。

ここで、UNZAについて少し紹介します。UNZAは1965年に創立され、学生数約6万人の総合大学です。鉱山学や地理工学など、日本の大学ではあまり学べない学問も学ぶことができます。

講義「Planetary Health」(惑星の健康の意)では感染症や現代の健康問題について様々な切り口から解説していただきました。講義の内容は感染症の性質や歴史から現在世界に及ぼしている影響、新型コロナウイルスまで多岐にわたるため、印象に残ったものを取り上げたいと思います。

印象深かったのは、新規感染症の75%は動物から人間の世界に持ち込まれたものというお話です。感染症は人間の間だけで広まるわけではなく、動物を媒介して広まるようです。例えば新型コロナウイルスやSARSはコウモリがもともと持っていたとされています。人から人に移る病気が感染症で、動物から感染するものは特殊な感染症という認識を持っていた私にはこの事実はとても衝撃的でした。

他にも統計地図を用いた解説があり、こちらも印象に残りました。使われた地図は医師の数、感染症患者の数、交通網の発達の度合いを面積の大きさを表したものです。感染症患者の少ない先進国は医師も多く交通網も発達しているのですが、発展途上国はその逆の傾向にあるそうです。交通網の著しく発達した日本においてはあまり気づかないことですが、医療へのアクセスという観点から、交通インフラの充実が医療の充実に必要なのだと気付きました。

講義の後は学生交流をしました。まずはUNZAの学生の方に大学紹介のプレゼンテーションをしていただきました。特に印象的だったことは、医学部の中にdisease control departmentという感染症に特化した学科があったことです。日本の医学系大学には感染症に特化した学科はないので驚きました。続いて北海道大学からプレゼンテーションを披露しました。私はプレゼンテーションを担当していましたが、終わった後たくさんのお礼をチャットにいただけて嬉しく思いました。

最後にブレイクアウトルームに分かれて、コロナ禍での学生生活の様子について話し合いました。私のルームではFSP生が3人、UNZAの学生が5人でした。こちらの発言にあまり反応が得られなかったり、相手の発言をしっかり理解できなかったりしてあまりうまく交流できませんでした。最後の学生交流にもかかわらず、あまり満足のいくものにできませんでした。別のルームでは相手の名前を呼んだり、チャットでのコミュニケーションを試みたりして活発に交流できたそうです。活発なコミュニケーションには相手が発言しやすいように工夫することが大切ということがこの経験から得た大きな学びです。

活動全体を通して日本とは講義の雰囲気が大きく違ったことが印象的でした。日本では講義は座って受けるのが当たり前ですが、UNZAでは各々に合った姿勢で授業に臨んでいるという印象を受けました。教授は厳密な時間設定にもかかわらず、熱心にお話をされてつい時間を過ぎてしまったり、学生はリラックスできる環境からのんびりと参加したりといった様子です。あまりに日本と違うため、FSP生はみんな衝撃を受けていました。

しかし、振り返ってみると自分の異文化理解の姿勢を認識できた経験だと思っています。私自身多文化理解の姿勢があると思っていました。しかし、いざ全く違う文化に触れるとすぐには受け入れられず、そこで相手に歩み寄り関係を構築することができないことを思い知らされました。日本の講義や交流の態度はあくまで日本で通用するものであって、ザンビアの方と交流するなら彼らの姿勢や文化を尊重しなければなりません。他のルームでの工夫はまさにその歩み寄りであり、自分が次にこのような異なる文化の人々と交流する機会があれば、もっと相手の文化や姿勢に歩み寄ろうと思いました。(文責：新田)



【UNZAの学生とFSP生の様子】

御講話報告書

在バチカン日本国大使館 岡田誠司様による御講話

日本航空株式会社 小林春佳様と柏頼之様による御講話

独立行政法人国際協力機構(JICA)ケニア事務所
加藤亮様による御講話

国際連合児童基金 - UNICEF 伏見暁洋様による御講話

SBI Graduate School 斎藤慎様による御講話

在バチカン日本国大使館 岡田誠司様による御講話

9月1日（水）に在バチカン日本国大使館の特命全権大使である岡田誠司様に、バチカン市国よりZoomにて御講話いただきました。岡田様は1981年に外務省に入省し、それ以来外交の最前線に立ってこられた方です。今までにバーレーン、カナダ、アメリカ、韓国、ケニア、アフガニスタン、南スーダン等々多くの国々にて御活躍されてきました。この度の御講話では岡田様の外交官としての御経験や、外交交渉の本質、過去や現在の国際情勢などについてお聞きしました。

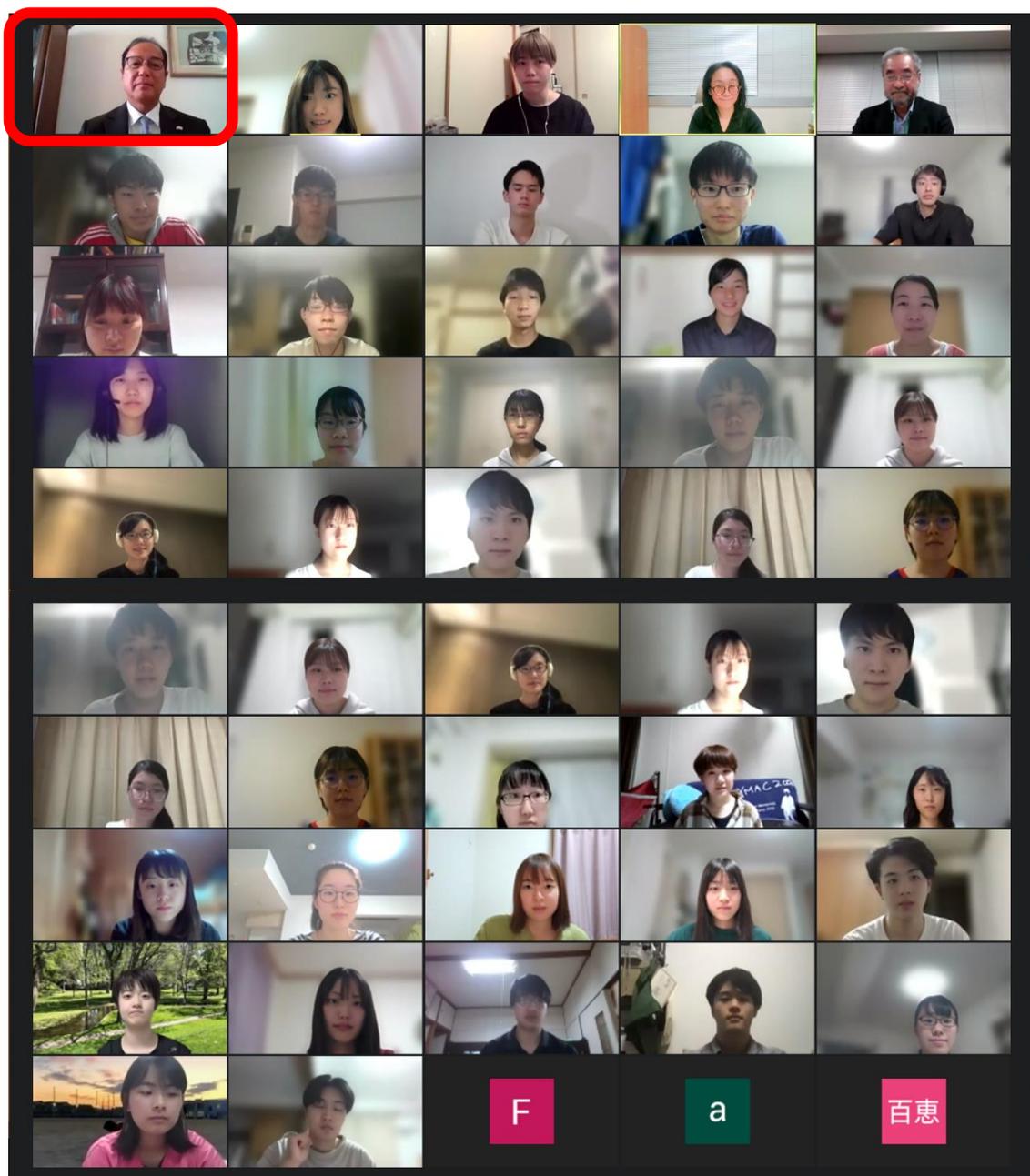
岡田様は外交の交渉においては、まず国内の意見をまとめ、次にその意見を国外に持っていくのだとおっしゃっていました。国内においても省庁や政党によって様々な意見が存在します。それらの意見を1つにまとめなければ日本の立場を決定することができません。そして、日本としてのまとまった意見を国外に伝えます。この外国との交渉で重要なのは「お互いの利益の均衡点を見つけること」だと仰っていました。話合いの中で、ある点では譲り、ある点では意見を貫くことでお互いが妥協できる条件を見つけていくのだそうです。この観点から、私は外交において「対話」が基本であると考えました。「対話」はこの第29回FSPにおいても非常に重要視されてきた要素です。私たちも授業の中でお互いの考えや意見をすり合わせる「対話」を経て、より良い案へと昇華させていく、または新しい学びを得るという作業を何度も行ってきました。外交においてもこのような「対話」を経て、納得のいく条件を模索していくのだと感じました。

加えて、岡田様はJETプログラム（The Japan Exchange and Teaching Programme）のお話を通して外国間での相互理解の重要性についても教えてくださいました。JETプログラムとは外国の青年を招致・任用し、外国語教育の充実と国際交流の推進を図る事業であり、岡田様はカナダからの語学指導講師の招致を御担当されました。文部科学省から伝えられた語学講師の応募要領は性別・年齢の記入欄があり、写真を添付しなければならない日本によく見るものですが、カナダでは審査の公平性を保つために性別・年齢の記入や写真を付けないものが普通なのだそうです。岡田様はこのようなギャップを埋めるために他国のことをよく理解し、国の制度を調整していく必要があるとおっしゃいました。そして、外交交渉においても人間同士がお互いにどのくらい理解しあっているかが重要だとおっしゃいました。私たちFSP生は今回の海外オンライン研修を通して海外の国や人々への理解を深めました。岡田様が相互理解の重要性をお伝えくださったことで、このFSPでの経験の重要性を改めて痛感するとともに、これからも積極的に国際交流を行って他国間理解を深めていく必要があると思いました。

最後に、“Think globally Act locally”という言葉を紹介します。この言葉は、「世界的な視野を持ちつつ、自分の足元から行動する」という意味で、20世紀の始めから教育や環境問題など様々な分野で使用されてきました。岡田様は、グローバル化が進んだ現代で日本が生き残るためにも、“Think globally Act locally”の姿勢を持つことが大切になるとおっしゃいました。常に世界とつながっている現代では、ただ自分のコミュニティのことだけを考えて行動するのでは不十分です。まず、世界を見る広い視野を通して自らの立場を整理し（Think globally）、そのうえで自分たちの利益のために行動する（Act locally）ことによって、はじめて自分のコミュニティを守ることができます。今まで世界では急速にグローバル化が進められてきましたが、グローバル化は一定の弱者を生み出す要因ともなっており、近年はナショナリズムを強める動きが表れています。特に、新型コロナウイルスの蔓延が各国のナショナリズムにさらに拍車をかけている状況です。一方でグローバリズムへの回帰を目指すバイデン大統領が登場し、ポストコロナ時代がどのようになるかは予想が困難です。このようにコロナ時代・ポストコロナ時代が私たちの大きなテーマとなっている今、“Think globally Act locally”は私たちの1つの指針となるのではないのでしょうか。

（文責：吉田）

御講話報告書



【岡田様とFSP生の様子】
※赤枠が岡田様

日本航空株式会社 小林春佳様と柏頼之様による御講話

9月3日（金）に小林春佳様、柏頼之様より、Zoomを用いて御講話を頂きました。お二方は北海道大学の卒業生であり、現在は日本航空株式会社様（以下、JAL様）にて勤務されています。

まず小林春佳様より御講話を頂きました。小林様は、JAL様のインド支店ベンガルール空港所にて運航管理者として勤務されており、現在は、インド人スタッフの方々への業務指導をされています。

小林様は御講話の中で主に3つのこととお話してくださいました。

1つ目は「英語は1つのツールでしかない」ということです。小林様は英語を聞くことも話すことも苦手で、当初は相手が何を言っているのか分からなかったとおっしゃっていました。その後、英語を克服したそうですが、それは国際社会で活躍するためのファーストステップに過ぎず、さらに仕事での知識や考え方を身に付けていくのに苦労されたそうです。将来的に海外で働くことも視野に入れている私たちにとって、英語を勉強することが必須条件ということに改めて実感しました。

2つ目は「日本とインドの文化の違い」についてです。仕事をするにあたり、私たち日本人は計画をしっかりと立ててから行動しますが、インドの方々には計画を綿密に立てずに仕事をし、臨機応変に対応しているそうです。インドの方々の計画に対する柔軟性に新鮮さを感じました。また、計画にあまり時間やエネルギーを割かず、とりあえず取り掛かってみることも一つの方法として取り入れていきたいと思いました。

3つ目は「互いの文化を理解し、尊重すること」です。小林様はインドのスタッフの方々に仕事を教える際、一からすべて教えるのではなく、まず現地の方にやってもらっているとおっしゃっていました。その中で良いところは残し、改善した方が良いところは「日本人なら～する」と丁寧に教えているそうです。「互いの文化を理解し尊重すること」の一環として、自国の基準を押し付けないことが大切だと思いました。私は今まで勉強を他人に教える時「一から教える」ことが多かったのですが、とりあえず1回やってもらって、その人の良いところを伸ばすという考えをこれから他人に勉強などを教える際の参考にしたいと思いました。

続いて柏頼之様より御講話を頂きました。柏様は常務執行役員として御活躍されています。

柏様からは御講話の中でJAL様のグローバル化について教えていただきました。昔は国際線の売り上げが3分の1程度で、その半分の利用客は在留日本人だったそうです。柏様は当時の状況をグローバルといえるものではなかったとおっしゃっていました。JAL様では1990年代後半から日本人利用客数が横ばいである一方、日本人以外の需要が伸び、グローバルエアラインの重要性がコロナ禍以前まで高まっていました。また、太平洋を渡ってアジアへ行く旅行客にとって日本の立地は好条件だそうです。JAL様がそれらに着目なさり、外国人向けのサービスを展開するようになったということを知りました。問題を解決するために原因を分析・追究し、実際に行動していく大切さを学びました。

また、「インバウンドの拡大・地域創生」と「ポスト・コロナ」についてもお話いただきました。2022年度の終わりからポスト・コロナにより経済が回復し始め、インバウンド需要は2023年には2019年レベルまで回復する想定であるということを知りました。その時のために地元の観光業を発展させたいと柏様は考えていらっしゃるそうです。観光業界はコロナ禍で一番と言って良いほど打撃を受けているにもかかわらず、前向きに未来を見据えていらっしゃる姿がとても印象的でした。私自身コロナ収束後、何をしたいかについて考えたことがあまりありませんでしたが、その時のことを見据えて今だからこそのこと、例えば留学するためにオンラインで海外の方と英会話の練習などをしていこうと思いました。（文責：五島）

御講話報告書



【柏様、小林様とFSP生の様子】
※上段赤枠が小林様、下段赤枠が柏様

独立行政法人国際協力機構(JICA)ケニア事務所 加藤亮様による御講話

9月7日(火)に、ケニア・ホマベイ州から、独立行政法人国際協力機構(JICA)ケニア事務所(以下、JICA ケニア事務所)加藤亮様より御講話を頂きました。

JICAは、日本の政府開発援助を一元的に行う実施機関です。JICA ケニア事務所は、ケニアと周辺諸国におけるJICA事業を担当しています。加藤様は大学を御卒業なさった後、NGO職員、JICA青年海外協力隊や協力隊訓練所スタッフ、プロジェクト業務調整員というキャリアを重ね、現在もJICAケニア事務所で長期専門家として御活躍なさっています。

加藤様は学生時代、国際交流事業プログラムを通じて海外に友人ができ、嬉しく思ったこと、また、就職活動をするにあたって、自分の知らない世界を学びたいと思ったことをきっかけに、国際協力事業に興味を持たれたそうです。私たちも今回の海外オンライン研修で、海外の学生と交流し、その楽しさや嬉しさを実際に体験したので、このお話に共感しました。

しかし、加藤様は、初めての海外勤務先であったフィリピンで、相当な苦勞をされたそうです。言語の壁をはじめさまざまなところでつまずき、与えられたことを真面目にこなすのに精一杯だったといいます。そのような苦しい時、精神的な支えになったのは、現地の人々の歓迎と、感謝の心だったそうです。ほんの少しの優しさや思いやりで、救われる人がいるということ、改めて認識させられるお話でした。普段は、感謝の言葉を口にすることをためらったり、恥ずかしがったりすることがありますが、もっと些細なことにも感謝して、ありがたそうと口に出すようにしよう、と思いました。

また、知ることと体験することは全く違う、ということをお話頂きました。具体例として、「水道のない生活」についての話題が取り上げられていました。ある国では、水道設備がないために、生活に必要な水を井戸からくみ上げ、家に運ぶという作業が必要で、その作業を子どもたちが行っているそうです。子どもたちの中には、作業のために、十分な勉強の時間や機会を確保することができない人もいます。メディアにこのことが取り上げられていることもあるため、この事実を知っている、という人は少なからずいると思います。しかし、ただ断片的な事実を知っている、というだけでは現状を正しく把握することは難しい、と加藤様は仰っていました。このお話は、新聞やテレビからその事実を知っているだけで、実際に現地の人たちと関わったことのない私たちには、特に印象に残りました。

加藤様は、以前、御自身が海外で働いていることを自慢げに友人に話していた時期があったといいます。しかし、次第に、海外で働くことは特別なことではないと思うようになったそうです。もちろん、海外で働く際には、言語や慣習などが日本とは違っているので、現地で安全に日常生活を送るため、また、仕事を成功させるためには、生活のさまざまな面で、日本で働く場合よりも、より自らの振舞いに気を使う必要がある、ということは事実ですが、日本で働く際には、仕事の速さや緻密さがより求められるなど、苦勞が多いことには変わりはありません。働く国や職業によって大変さや苦勞のポイントが違うだけなのだ、と加藤様は仰いました。どんな仕事にも、その仕事なりの苦勞や大変さがあり優劣はないのだ、ということ、以前から分かっていたつもりでしたが、加藤様のお話によって、はっきりと認識することができました。

御講話の最後には、加藤様が御自身の経験から、若い学生たちに特に伝えたい、2つのメッセージをお伝えいただきました。1つ目は「親が元気なときに親孝行をするべきだ」ということです。大人になるにつれて、一人暮らしを始めたり、就職や結婚をしたりすることで、自分たちが考えている以上に、親と一緒に過ごすことのできる時間は少なくなります。そのため、親が元気なうちに親孝行をして欲しい、と加藤様は仰っていました。このお話から、自分の両親に対する態度を顧みて、残された時間をもっと大事にしようと思いました。

御講話報告書

た。2つ目は「走っている人だけにパスが来る」ということです。苦しい状況にあっても、負けずに努力をしている人にも、チャンスは訪れるのだ、という意味の言葉です。また、努力している自分を信じて、努力を続けることでチャンスがやってくることもあるとのお話がありました。何をやるにしても、困難を乗り越えていく強さが大切になるのだと、改めて認識しました。

海外に出て働く困難さ・やりがい等について、実際に現場に出て働いていらっしゃる加藤様から直接お聞きできたことは、今後のキャリアプランを考えていくうえで、大変貴重でありたい経験でした。御講話から、加藤様の仕事に対する熱意、高い志を、強く感じました。私たちもそれぞれに志を持って、今後のキャリアを歩んでいきたいと思えます。

(文責：西岡)



【加藤様とFSP生の様子】

※赤枠が加藤様

国際連合児童基金 - UNICEF 伏見暁洋様による御講話

9月8日（水）、国際連合児童基金 - United Nations Children's Fund（以下、UNICEF）の在タイ東南アジア・太平洋地域事務所の教育専門官である伏見暁洋様に、オンラインにて御講話いただきました。

UNICEFとは、世界の子どもたちの命と健康を守る国連機関であり、具体的には、保健、栄養、水と衛生、教育、暴力や搾取からの保護などの支援を、約190の国と地域で行っています。御講話の中では、伏見様のUNICEFでの経験を通じた興味深いお話がいくつもありました。

まず1つは、地域に合った支援を行うことが重要ということです。伏見様はこのことを「現場主義」と仰っていましたが、その地域の生活に沿った活動でなければ拒絶されてしまうのだそうです。UNICEFの活動は、海外に赴いてその地域に直接支援する事が基本ですが、その際、支援国と被支援国の間で文化や考え方が違うのは当然です。現地での活動で文化の壁を乗り越えるために、現地のスタッフを通して現地語で伝えることで、理解を得やすくしているそうです。また、学校での教育支援では、現地の方々の生活に合わせるために時間割をフレキシブルにする、という工夫を実際に行っているそうです。このお話から、支援とは相手が受け取り利用して初めて意味をなすものなのだ、ということを実感しました。支援を受け取る側の気持ちを配慮するという姿勢は、私たちの日々の助け合いの中でも見習うべきだと考えます。

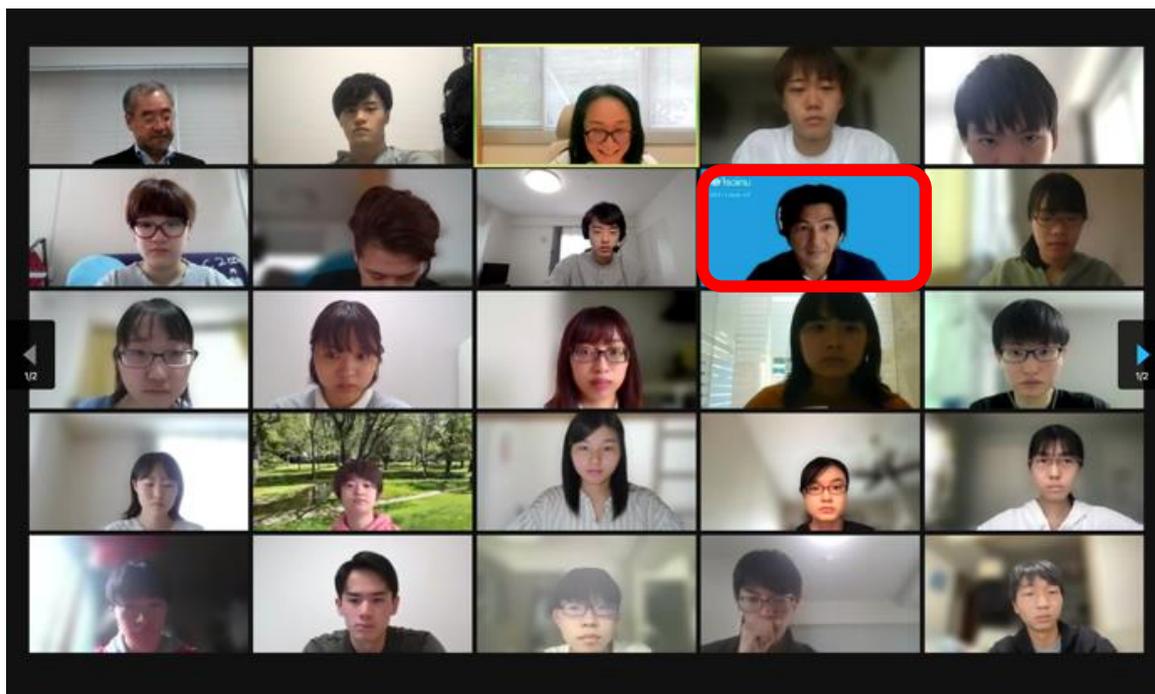
また、世界中の子どもの教育について、低・中所得国の10歳の子どものうちの53%が簡単な文を読めないことや、6人に1人は学校に行く事ができず、さらに3人に1人は後期中等教育（日本の高校にあたる）を受けることができないという厳しい現状を教えてくださいました。新型コロナウイルス感染症による教育への影響も大きく、例えばフィリピンでは現在、15歳以下はコロナウイルス対策のため家から出られないという決まりがあります。こういった状況が、今までUNICEFが進めてきた教育の浸透に大きな悪影響を及ぼしており、伏見様は、「コロナウイルスによって、作ってきた土台が壊された」と仰っていました。

上記のように、コロナウイルスが子どもの教育へ大きな打撃を与えたことは事実です。しかし、伏見様は悪い面だけではないと捉えていらっしゃるようです。今までUNICEFでは「現場主義」を重視し、現地での支援をしてきましたが、実際に海外へ赴くことが難しくなった今、「現場主義」を崩すことなくオンラインでもできる支援はある、ということに気付かれたそうです。詳しいことまで伺うことは叶いませんでしたが、Zoomによる現地スタッフとの話し合いなどという形で支援を続けておられるそうです。このようにUNICEFは、コロナウイルスによって活動を大きく阻害されながらも最大限の支援を行なっています。コロナウイルスだからあれもできない、これもできないと気を落とすだけでなく、できることを見つけて前向きに努力することが大事だと感じました。

さらに、キャリア形成についてのお考えについても、伏見様御自身の経験を踏まえてお話しいただきました。国連職員は公務員のように安定した職種のイメージがありましたが、数年に一度再就職しなければならない仕組みで、伏見様が「一生フリーター」と仰っているほど、安定性とはかけ離れた仕事だそうです。このお話を聞いて「将来が不安ではないのか」と疑問を持つ学生もいましたが、「今時終身雇用というのではない。長いスパンで人生を眺めて、やれることを一生懸命やりましょう。」という心強く、また、私たち自身のキャリアについても考えさせられるようなお言葉をいただきました。

このように、FSP生は今回の御講話を通し、今まで知らなかったUNICEFの活動や問題、キャリアの在り方などを学ぶことができました。伏見様からいただいた貴重なお話を学生一人一人が考え抜き、自分の将来に生かしていければと思います。（文責：福田）

御講話報告書



【御講話の様子】
※赤枠が伏見様

SBI Graduate School 齋藤様による御講話

9月9日（木）に、SBI大学院大学の講師を勤めていらっしゃる齋藤様より、米国から御講話を頂きました。大学院大学は「通信制（オンライン・日本国内）でMBA（経営学修士）を取得できる」大学です。齋藤様はこのSBI Graduate Schoolの講師の他に、企業の社会的責任（CSR）・SDGsコンサルタントとしても御活躍されています。

御講話では、齋藤様の御略歴に沿って、大学時代に学んだことや、海外でのボランティア活動、就職活動の御経験、これまでの仕事内容、現在の活動内容などについてのお話を伺いました。

お話の中心は、世界をより良いものに変えるために行動する人、「チェンジメーカー」になる、というものでした。チェンジメーカーにつながるお話を二つ紹介します。

1つ目は、誰もが持っている、才能や性格、経験、持ち物などを指す「ギフト」についてです。「ギフト」は誰でも持っていて、共有したり与えたりすることができ、その分の見返りを求めないことが特徴です。自分の「ギフト」を活かして、自分の半径5メートルという身近で小さなところから、私たちでも社会を変え、世界をよりよくすることができる、その意味で私たちは誰でもチェンジメーカーになれるとおっしゃっていました。

2つ目は、お財布の使い方次第で自分の意思を社会に伝えられる、というお話です。例えば、リサイクルに力を入れている会社の製品を選ぶことで、リサイクルに協力する、という社会に対する意思表示ができ、環境保護活動を促進することにつながっています。つまり、自分の行動の一つひとつが、社会に自分の意思を伝える力を持っていて、自分も社会と繋がっている、だから私たちは誰でもチェンジメーカーになれるのです。

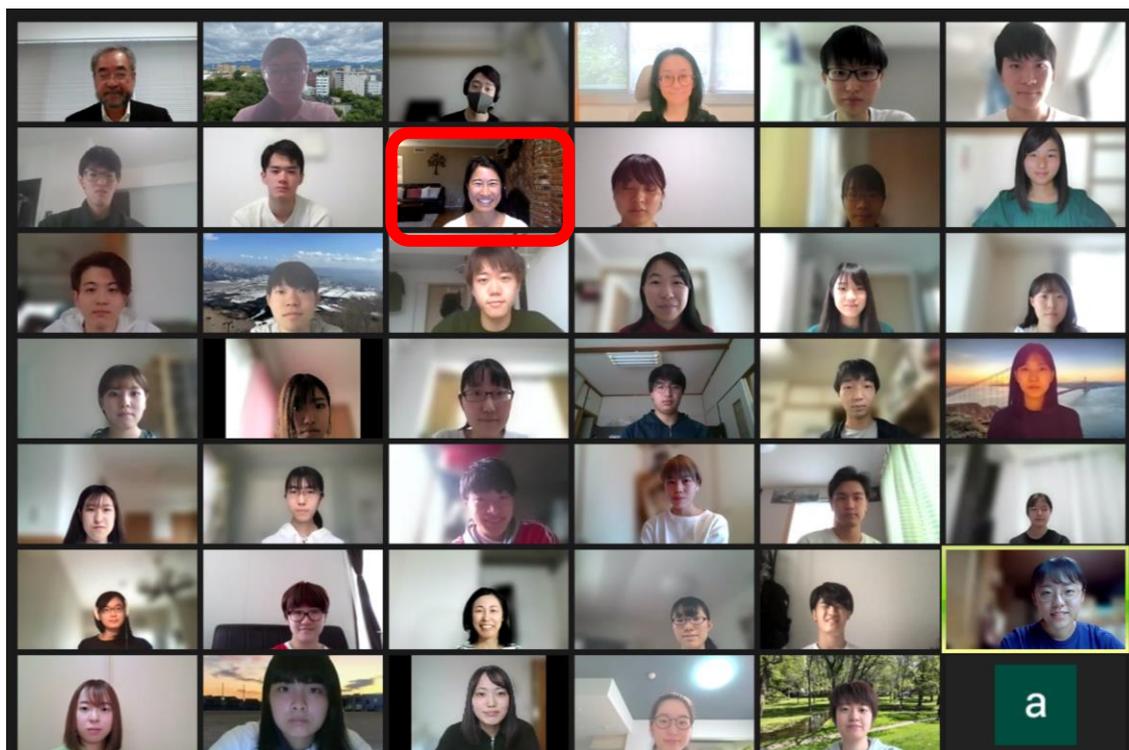
力を持っていない自分一人でも、小さなことの積み重ねで、社会を変えようという大きなことに関与できると知り、私たち自身も、新しい大きなことに挑戦するハードルが下がったように思います。例えば、私は、齋藤様の御著書で紹介されていたように、少しでも海の環境を守るために、海のエコラベルのついた魚を購入しようと考えようになりました。

加えて、生き方についてのお話を紹介します。齋藤様は「感情を羅針盤にしてきた」とおっしゃっており、自分の心の声に従うことで、自分にあった仕事を選ぶことができるというメッセージをくださいました。仕事の選択も含めて、好き、楽しい、やりがいを感じる、などといった感情を基準に進路選択をするのもありだと気付かされました。そして、自分の心の声に気付くための8つの質問を紹介していただきました。例えば、自分が子どもの頃になりたかった職業は何かや、1年間自由な時間があったらどうするかといったものがありました。同じグループのメンバーの一人は、その質問に答えることで、自分のしたいこと、好きなことを再認識することができ、進路決定を後押しされました。感情を基準に仕事選びをするのならば、自分がしたいことは何かを考えなければならないため、齋藤様の御講話は、自分が何をしたいのかについて考える契機になりました。

今後の自分のキャリアを充実させるためには、目の前にある大学の授業課題をなんとなくこなすだけでなく、今自分ができることと、大学卒業後に取り組みたいことのつながりをイメージしていくことが大切だと気付かされました。学生時代こうしておけばよかった、というような後悔がないように、今できることに一つずつ取り組んでいこうと思います。

（文責：齋藤）

御講話報告書



【斎藤様とFSP生の様子】
※赤枠が斎藤様

事後学習

振り返りミーティング

事後授業

事後学習

振り返りミーティング

海外オンライン研修期間中、毎日研修が終わるごとにリーダーズ（リーダー1名とサブリーダー2名）の運営で振り返りミーティングが行われました。FSP生が支援員・ボランティアの方々のアドバイスを参考に、各研修の反省のために自発的に企画したミーティングです。FSP生がランダムにブレイクアウトルームに分かれて意見を交換することで、研修の内容を振り返って学びを深めるのはもちろんのこと、他グループのメンバーとの交流を図ることもできました。ミーティング中には各ブレイクアウトルームごとに議事録を作成し、ミーティング後には1人一言振り返りシートに反省や感想を書き、振り返りの記録を残しました。各研修先ごとに振り返りの内容を一部紹介します。

<協定大学交流>

IPB University

- ・理想の英語力と現状のレベルとで想像以上にギャップがあった。
- ・相手の質問を恥ずかしがって聞き返さなかったために、自分に対して言われているのかわからず、結果的に沈黙を作り出してしまった。

Curtin University

- ・事前課題や事前資料のおかげで、授業を理解することができた。予習の大切さを感じた。
- ・事前に自分が興味のある分野や専攻の内容と英単語を調べておいたことが役に立ってよかった。

University of Helsinki

- ・日本に興味を持って下さる方が多く、日本語もとても上手だった。「語学はとりあえずチャレンジしてみることに！」と言われたので、自分も英語をもっと頑張ろうと思った。
- ・英語・日本語交流会でフィンランドについて調べていたので、質問がスラスラ出たりして楽しかった。私たちがうまく話せなくてもヘルシンキ大学の方々は優しく耳を傾けてくださってありがたかった。

University of Zambia

- ・全員ビデオオフで、時間も短かったので、満足のいく交流はできず、オンラインの交流の難しさを学生交流最後にして思い知らされた。
- ・相手方の学生があまり話してくれなかったので、自分が喋らなきゃと思い、逆に積極的に話せた。

<御講話>

在バチカン日本国大使館 岡田様

- ・赴任地でのお話もたくさんあったけど、私たち自身の、それらに関する前提知識や国際情勢についての情報が不足していたように感じた。
- ・外交官としての豊富な経験やグローバルイゼーションについて貴重なお話を聞いて今後の身の振り方を考えさせられた。

事後学習

日本航空株式会社 柏様、小林様

- ・文化の違いを伝えるには、価値観の違いを細かく伝えていくのが大事というお考えが印象に残った。
- ・普段意識していないもの（選ばなかった選択肢や感謝の気持ち）を意識することが大事だと感じた。また、考え×熱意×能力のうち考えが最重要事項であることは興味深かった。

国際連合児童基金 伏見様

- ・「なんとかなる」というようなマインドセットが印象的だった。将来のことをあまり悲観しすぎずに、とにかく目の前のことを一生懸命やるようにしたい。
- ・キャリアや人生について考える手段として色々なアルバイト(特に今後の自分のキャリアとは無縁になる可能性の高いもの)に積極的に参加してみるという考え方は面白かった。自分もそういったバイトを始めたい。

独立行政法人国際協力機構ケニア事務所 加藤様

- ・「走っている人にだけパスがくる」という言葉が印象に残った。私も自分を信じて努力を続けようと思った。
- ・「若いうちに失敗しておこう」その通りだと思った。FSPではたくさん失敗したが、それを先生や支援員の皆さんがサポートしてくれる環境であるので、こういった機会に感謝せねば、と思った。

SBI大学院大学 斎藤様

- ・社会問題について考えるとなると身構えてしまうところがあるため、身の回りの問題から考えると良いという話を聞いて、気持ちが軽くなった。
- ・財布を開いて企業に投票できるという発想は今までないものであり、これが企業、社会とのつながりでもあるのだと思った。

協定大学との交流においては、語学力が話題になることが多かったようです。最初は英語での会話に戸惑いを覚えていましたが、振り返り会のたびに反省点を見つけて次の学生交流で改善することで、だんだんと積極的に交流を行えるようになっていったと思います。

御講話においては御講話者様のキャリアを知るだけでなく様々な信念や価値観に触れ、自身の生き方を見直すきっかけになったのではないかと思います。また、振り返りミーティングにて御講話者様の信念や価値観についてどのように感じたか、それを通して自身の生き方をどのように変えたいかについて共有することで、多様な考えに刺激を受けることができました。

振り返りミーティングを通して海外オンライン研修での学びをより深められたと思います。今後の学習でも新たな学びを得るために仲間と考えを共有する機会を作っていきたいです。

事後授業

第1回事後学習：9月15日（水）

第1回事後授業では、グループ3,4が成果報告会で伝えるメッセージについて主題とその理由を発表し、それに対して他グループのFSP生や先生方がフィードバックを行いました。グループ3,4はそれらのフィードバックに基づいて成果報告会でのプレゼンテーションの準備をしていきました。その次に、キャリア・デザイン・ワークシートを活用してFSPを通して学んだことやお互いのキャリア・デザインについて共有しました。加えて、3名のFSP修了生の方々からFSP後の「セカンドステップ」についてお話を伺いました。他のFSP生や先輩方のキャリア・デザインを知ること、自らのキャリア・デザインを見直す良い機会になったと思います。



【第1回事後授業の様子】

第2回事後授業：10月1日（金）

第2回事後授業では、御講話者様を含むFSP生以外の方々にも御参加いただき、オンラインでの成果報告会を行いました。3名のFSP生が授業概要の説明をし、グループ3,4がそれぞれFSPで学んだことについてプレゼンテーションをしました。グループ3,4は教員の方々のご協力のもと、このプレゼンテーションのために長い間試行錯誤を繰り返し、素晴らしいプレゼンテーションができるよう尽力してきました。また、グループ2は一般学生の参加を呼び掛けるため右の成果報告会ポスターを作製しました。

この成果報告会では、FSPを知らない方々に向けてFSPの魅力を伝えるのはもちろんのこと、FSPの魅力を改めてまとめることで、自らの学びを再認識する良い機会となりました。



【成果報告会ポスター】

終わりに

本報告書を最後までお読みくださりありがとうございます。

コロナ禍の現在、本来海外を訪れて行う研修であるFSPは前回に引き続きオンラインでの開催となりました。本研修は「オンラインでの海外研修」の可能性を実感するものとなりました。いつ、どこにいても様々な国の様々な人とつながれるのはオンライン研修だからこそだと思います。「コロナ禍ではできないこと」に注目しがちですが、「コロナ禍だからできたこと」に焦点を当てて、この時代を乗り切っていきましょう。

また、コロナ禍の状況で本研修を受けることができたのは、御講話者様や協定大学の皆様、担当教員や事務スタッフの皆様、支援員やボランティアの皆様の御尽力のおかげです。私たちFSP生はこのことを心に刻み、自らのキャリア形成に努めて参ります。

謝辞

この度はお忙しい中、私たちのために海外オンライン研修にて御協力くださった御講話者様や協定大学の皆様にこの場を借りて感謝の意を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。

また、お忙しい中長い間ご指導をしてくださった川端千鶴先生や井上修平先生をはじめとする担当教員の皆様、事前授業にて御講話いただいた茂木文夫教授、親身になって御支援下さった支援員・ボランティアの皆様、事あるごとに私たちをサポートしてくださった事務スタッフの石倉様、中島様、望月様、大変ありがとうございました。

編集後記

第29回FSPでは海外で御活躍されている多くの方々の御講話、協定大学の教授の皆様の授業を拝聴したほか、協定大学の学生の方々と英語での交流をさせていただきました。一度も海外に出たことのない私にとって新鮮なお話や経験ばかりでした。「何がしたいか」や「何ができるか」を追求して生き生きとお仕事をされている方々を拝見して、自らもそのようになれるという可能性に胸を踊らせる一方、英語を用いた授業や学生交流で自らの英語力の乏しさを痛感いたしました。この経験を無駄にせず、これからの学生生活にてより一層学問に励みたいと思います。この報告書が、海外について知りたいと考えている学生の皆様がFSPに興味をもつきっかけとなれば幸いです。(吉田若葉)

何となく海外留学に行きたいと考えていて、その準備として軽い気持ちでFSPに応募しましたが、予想を遥かに超えた充実度で本当に数多くの学びを得ることができました。自分にとっては、これからキャリアを積んでいく上での「土台」を構築するきっかけになったように思います。何が得意で何が不得意なのか、自分を見つめ直す機会を作ることができて非常に意義深い時間を過ごせました。この貴重な経験を忘れることなく、海外留学や国際インターンシップといった次なるステップに歩んでいきたいと思っています。さて、この報告書には一人一人のFSP生が得た様々な学びで溢れています。FSPに興味を持たれている方にとって、本書が一步を踏み出すきっかけとなれば幸いです。(伊藤琢人)

4か月にわたったFSPもついに終了となりました。最初は英語を練習する機会になればと軽い気持ちで申し込みましたが、様々な場所で御活躍されている方々の御講話を拝聴したり、有意義な研修となるようチームメンバーと試行錯誤したりと、期待していた以上の経験をたくさんすることができました。第29回は前回に続きオンラインとなり、海外に研修に行くことはできませんでしたが、Zoomを使って様々な地域の方々と交流したり、メンバー間で何度もオンライン交流会を開いたり、渡航研修に負けないうらい充実した研修ができたと思います。ご協力いただいたすべての皆様に感謝申し上げます。この報告書が読者の皆様のお役に立てば幸いです。興味を持たれた方はぜひFSPに参加してみてください。

(佐藤匠馬)

元々海外でのキャリアに憧れのあった私でしたが、FSP参加前は何かから始めればいいのか、どんな能力が求められているのか、全くわからない状況でした。オンラインではありましたが、今まさに世界の最前線でキャリアを積み重ねている方々の御講話を拝聴し、自分のキャリアを真剣に考える機会が得られ、とても貴重な経験となりました。夢や憧れであった「グローバルキャリア」を現実的な「目標」として考えることができるようになり、時間に限りのある学生生活で自分が何をしたいか、何をすべきか、がよくわかりました。海外に憧れがあり将来は海外で働いてみたい、と考えている方はFSPに参加することで、その夢までの具体的な道筋が見えるようになると思います。興味を持った方は是非FSPに参加してみてください。

(酒井泰人)

私は将来やりたいことが見つかっていなかったため、視野を広げたいと考えFSPに参加しました。私は、FSP参加前は、「就職活動が始まる前にやりたいことを見つけなくては」と焦っていました。しかし、川端先生や様々なキャリアを持つ方々から御講話を拝聴していくうちに、「やりたいことが見つかったら、見つかったときにやりたいことへ向かっていけばいいのだ」と思うようになりました。一つの企業で働き続けるのではなく、自分のやりたいことを追い求め続ける生き方もあるのだと気づかされました。今は、無理にやりたいことを見つけるのではなく、様々な情報を得ながら視野を広げていこうと考えています。このようにFSPに参加することで視野が広がると私は思うため、ぜひFSPに参加してみてください。

(横山美裕)

私はFSPを通してグローバルキャリアやチームワークについての考え方が大きく変わりました。はじめはただ漠然と海外で働くことへの憧れや社会人になるための勉強をしたいとの思いからこのFSPに参加しました。事前学習や海外オンライン研修によって私は真のチームワークとは何かを知ることができたと感じています。この授業を受ける前までは、ただ自分に与えられた役割をこなすだけで十分だと思っていましたが、実際はそうではありませんでした。グループメンバーや支援員・ボランティアの方々とのお密な連絡によって各個人がどのように作業を進めているのかを知ることができ、また、グループミーティングによって文面だけでは伝わらない各個人の考えを共有することができました。これらの貴重な経験を今後の活動に生かしていきたいと考えています。FSPに携わってくださった全ての方に感謝しております。ありがとうございました。

(後藤衣玖)



北海道大学

HOKKAIDO UNIVERSITY

一般教育演習（フレッシュマンセミナー）：グローバル・キャリア・デザイン1

第29回FSPオンライン 全体報告書：2021年11月8日

編集

第29回FSPオンライン グループ5 全体報告書編集担当
吉田 若葉 伊藤 琢人 後藤 衣玖 酒井 泰人 佐藤 匠馬 横山 美裕

お問い合わせ先

北海道大学 高等教育推進機構 学務部国際交流課

TEL : (011) 706-8040

Email : ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website : http://www.oia.hokudai.ac.jp/be_global/

Facebook : <https://ja-jp.facebook.com/1ststepprogram/>